

重点目標		総合評価	
(中・長期的)	1 国際親善文化観光都市である、軽井沢ならではの地の利を活かした学びを推進し、地域に信頼され、地域に貢献できる学校を目指す。	1 コロナ禍にあり制限はあったものの、授業、課外活動において軽井沢町を中心とした地域での学び・地域との連携を積極的に行なった。今後も地域の資源を有効に活用し「本校でしかできない学び」を通じて、生徒の自己有用感、社会の一員としての自覚と責任感の醸成に努めていきたい。	
	2 生徒の安心安全な学校生活を保障すると共に、主体的な活動を推進し、発信力・コミュニケーション力・協働性を有する人材を育成する。	2 「生徒一人ひとりの良さや個性を認め伸ばす」ことを意識した学習指導、生徒指導により、穏やかな雰囲気の中での学びを継続することができている。今後も丁寧な生徒理解と生徒支援に努め、子どもたちの社会的資質・能力の醸成に努めていきたい。	

今年度の重点目標		成果と課題	
①	学習実態の調査・分析や授業改善を推進し、生徒の学習意欲向上を目指す。	生徒の学習意欲については、3学年を中心に成果が見られる。取り組みを精選しつつ引き継いでいきたい。授業改善については、次年度の学習指導要領新課程実施に向けて、より効果的な授業カリキュラム・評価方法などを各教科で研究を重ねていきたい。	
②	社会の一員としての責任感を養い、規律を持たせるための粘り強い指導を行う。	規律意識を向上させるという目標に向けて、きめ細かな指導を各学年で行ってきた。その結果、本年度は、問題行動が激減した。今後はさらに、職員・保護者・地域との連携を密にし、日常的な相談や生徒理解を重視し、生徒の心の変化にも気づく、きめ細かく丁寧な指導を心がけたい。また問題行動を未然に防ぐような予防教育にも力を入れていきたい。	
③	生徒が深く考え、判断し、行動できるように主体的な活動を推進する。	生徒会活動を通して、生徒の主体的な活動を支援した。行動の前提となる生徒の深い思考を引き出すことや、状況に対する判断力をつけることが不足している点に課題がある。安直な思考・判断に流れないよう、どのように思考力・判断力をつけていけるかを教育活動全般で考えていく必要がある。	
④	多様な考えをもつ人々と協働できるよう支援する。		

対象	評価項目(活動目標)	評価の観点	成果と課題	評価	改善策・向上策	
進路学習指導	① 生徒の学習意欲向上を目指した授業改善	授業互観回問・授業アンケートを効果的に実施できたか。	・昨年度に引き続き互観回問中の統一目標(生徒の学習意欲向上のための工夫ある実践)を設定し、教科の専門性を越えた議論がしやすい状況を整えた。参加率は課題を残している。 ・昨年度の「軽高会議」で生徒と共に考えたアンケートを、今年度も引き続き実施している。	C	・授業アンケートについては、授業への満足度が上がってきているとの結果が得られた。ただし、この点についてはアンケートの実施方法の変更(紙媒体からGoogleformへ変更)による影響も考えられるので、慎重に受け止めていきたい。 ・今後も生徒の声を大切にし、生徒と協働した授業改善を進めていきたい。	
	① 意識調査を活用した教育活動の振り返り	意識調査の実施・分析・活用ができたか。	・1月の基礎力診断テストや探究学習の発表時機に合わせて、社会参画意識や入学時からの生徒の成長実感を見極めるための質問を投げかけている。結果を分析し、それぞれの活動を検証していききたい。	B	・意識調査を始め3年目を迎えるが、年々アンケートのボリュームが増えてきている。ただ単に調査するにとどまらず、有効に活用していけるよう、内容や実施時機を見直していく必要がある。	
	③ 「総合的な探究の時間」の基礎づくり	生徒の成長実感や育み、社会参画意識や自己有用感を向上できたか。	・担当者に生徒を割り振り、学習を推進した。「就業体験」や「修学旅行」、「フィールドワーク」が実施できず、計画の修正を余儀なくされたが、適宜計画を練り直し進めていくことで、発表・まとめまで行うことができた。その結果、前向きに社会に出て行動する生徒が見られた。今後は、より精緻された計画や実施方法を検討していききたい。	C	来年度の「総合的な探究の時間」については、今年度の取り組みを踏まえて、3年間を見据え、学校の教育活動として良い形になるように授業設計を行い、生徒の成長に寄り添っていききたい。	
生徒指導	① 生徒の学習課題の分析と個別最適支援	基礎力診断テストのGTZを向上できたか。	・各学年、基礎力診断テストの扱いを工夫し、成果に繋がっている。「すらら」の活用は1学年を中心に、学習時間の増加が見られた。 ・面談などを通じて生徒への声かけを工夫し、個々の課題に向き合う意識を醸成していききたい。	B	・学年集会(意識付け・学習計画)から調査結果のフィードバックの流れは確立できてきている。この方法を継続していききたい。 ・生徒個々の学習課題の認識については、学年とも連携を図り、より効果的な支援を構築していききたい。	
	② 安心安全な学校生活の実現	問題行動を未然に防止する「予防教育」と指導ができたか。	担当を決めて校内巡回を行った。また、昼の立ち寄り行為を行わず外出する生徒を抑制した。途中、職員の負担軽減のため回数等変更し行った。生徒指導係で朝・空き時間・昼休みにゴミ拾いを兼ねて外の見回りをしたり、また放課後駅周辺を巡回して、不審な生徒に対して声かけをして問題行動の抑止をした。また職員会では、問題行動を職員に周知し、指導の共通理解を促すよう努めた。	B	本年度は問題行動の件数は昨年度と比べてかなり激減した。大きな問題になる前に適切に対応し、未然に防ぐこともできた結果だと思う。引き続き、問題行動になる前に未然に指導をしていく予防教育を継続・徹底していききたい。	
	② 交通安全の徹底	交通法規や校則を遵守し、交通事故防止を図ることができたか。	春と秋に朝の交通安全学習を行い、自転車の乗り方等について声かけ指導を行った。併せて群馬交通安全委員会による自転車置き場でのステッカー貼付、盗難防止指導を行った。また、随時、ヘルメット着用を呼びかけた。大車には至らなかったが自転車事故が6件発生した。原付講習会は、5月に対象者4名について教室前にて実施し、事故は起きていない。	B	防災交通安全講話を軽井沢警察署の方を講師に、リモートより行った。短時間に内容を詰め込み過ぎた点を改善していききたい。立ち寄りについては、職員の負担軽減に留意しながら継続実施していききたい。	
対象	③ 自覚と責任ある行動の実現	高校生としての自覚と節度ある行動を各部署と連携して指導できたか。	今年度もコロナ禍の中で、生徒の人間関係作りに苦慮しながら、きめ細かな指導を各先生方に行ってもらった。しかしながら、昨年と同様に苦情も多かった。また、電車の乗り方について、マナー喚起について注意喚起をした。	B	長期休業の前には保護者宛に長期休業の過ごし方について文書を作り、配布をしている。保護者の手元に文書が渡らないことも考えられるので、オンラインツールを使うことも検討したい。また、マナー喚起については生徒会と連携して注意喚起をすることも検討したい。	
	② クラブ活動の活性化	恒常的な活動をするクラブ員数を増やせたか。	・4月から部活動加入率47%である。 [68%(2015)→61%(2016)→59%(2017)→59%(2018)→59%(2019)→49%(2020)]	C	236人中111人がクラブ活動に参加。クラブ員数の減少が続いている。来年度は、夏休み明けにも体験入部期間を設け、クラブに触れる機会を増やし、参加しやすい環境を整える。	
	③ 読書習慣の定着と授業連携	朝読書・学級文庫の実施、授業を含む図書活用を促されたか。	・毎週火曜日に朝読書を実施。図書委員による学級文庫設置、随時 時事プリントを用意し、朝読書の習慣が徐々に定着している。授業利用も増えている。 ・状況を見ながら図書委員の企画(店頭選読、読書回問等)も実施。全校生徒の図書館活用を促された。	B	・読書に向かない生徒に対しての対応策を検討し、生徒図書委員との連携をはかる。 ・オンラインデータベースの試験利用や授業との連携で読解力の育成に取り組む。	
特別活動	② 生徒会の主体的な運営	生徒が主体的に活動し行事を運営することができたか。	・生徒が主体となってコロナウイルス感染対策を工夫し、文化祭やクリスマスを実施することができた。 ・活動が全面に出過ぎてしまい、意義や目的について深く考えることや、状況に対して冷静な判断をすることが疎かになってしまった。	B	目的・目標の定め方や、何のために活動するのかといった部分を丁寧に指導する。そのためにも生徒の話し合いや企画立案の段階に、積極的に寄り添い、三役中心に役員生徒(全校生徒の意識・行動を促す)に委ねていきたい。	
	④ 生徒の自己肯定感・人権感覚の育成	人権・平和・いのちの学習を通して、豊かな人間性を育むことができたか。	・本年度はLGBTQを人権学習のテーマとした。学習プリントによるHRでの学習、映画「カラコエの花」視聴、感想文作成を行い、多様性・自己決定について学習する機会とした。 ・「カラコエの花」は生徒たちにとってわかりやすかったようで、感想文からは真摯に考える姿がうかがわれた。 ・「いのちの月間」と職員研修については取り組みに課題を残した。	B	・来年度も年度初めに全校人権学習のテーマを決定し、学習内容を決定する。 ・「いのちの月間」の取り組みについて、人権意識向上を図るために検討していききたい。 ・職員研修について充実を回りたい。	
	③ 心身の自主的健康管理の推進	自らの健康について関心もてる取組、機会を設定できたか。	・今年度も新型コロナウイルス感染症との共生の中、生徒達の好奇心や学びへの意欲・意欲・夢や希望に向かふこととなるよう、心身の健康増進やその保持増進を課題とした。その結果、生徒・教職員共に、たくましく進歩した一年となる。各部署での活動制限はあるものの、その中で今、自分ができることとひとひらが、高い意欲を持ち感染症対策への行動力に変えることができた。また、1学年では7月の性教育、1月の薬物乱用防止教育を開催しコロナ禍において改めて「生きる」ことを考え、今、ここに生かされていることを学ぶ機会とした。自分は決して「ひとりぼっちではない」「困った時には助けがもらえる誰かとつながる」との大切さを1学年全体で考える貴重な時間となった。	B	様々な教育活動が新型コロナウイルスの感染状況をみながら実施されていくため、予定の変更を余儀なくされた。が、各関係部署が迅速かつ的確に消毒作業や環境をご提供下さり対応することが出来た。今後今年度の実践や取り組みを参考に、実施をお願いしたい。また、生徒保健委員会では公衆衛生全般について学びその成果を掲載結果発表を通じて広報活動に尽力。特に10月の「ハウレンソウ」では全校生徒への「マスク着用・手洗い・手指消毒」の再呼びかけを計画。少しでも学校が明るく、生徒が楽しい気分になるよう演出にも力を入れた心の健康」に重点を置いた活動も実施。コロナ禍だからこそこれらも日々生活に影を添えらるよう生徒保健委員会の活動に期待する。	
営繕美化	② 校地内外の環境美化の徹底	毎日の清掃を通して、生徒自ら学習環境の整備と校地内外の美化に取り組むことができたか。	・町より配布された苗花をロータリー、正門付近、中庭に植え替えて景観に彩りを添える事ができた。 ・文化祭最終日に学校周辺や国道歩道のゴミ拾いを全校で行い、町内の美化に貢献できた。 ・ゴミステーションでのゴミの分別に向けて積極的に協力する事ができた。 ・外掃除は十分とはいえなかった。	B	・古い清掃用具については、計画的に順次交換をしていきたい。 ・モップ交換の適切な行ななかつたので、来年度は計画的に進めたい。 ・学習環境の更なる美化に向けて、様々な意見・要望を可能な限り取り入れていきたい。	
	③ 三者でつくる軽高会議の発展	三者協働で学校をよりよくするために話し合い、それを発展させたか。	・第43回は5月に、第44回は12月に開催した。 ・第43回は制限について議論した。 ・第44回では、課題についての取り組みの報告を行い、さらにそれを発展させていくための討議を行った。	B	充実した会議になった。昨年度、出席者から時間・機会が足りないという意見が多く寄せられたので、43回については、30分授業短縮し話し合いの時間を確保した。来年度もお願いしたい。	
	① 私たちの住む地域について理解を深める	外部人材や大学等と連携した効果的な授業が企画できたか。	「軽井沢学」「観光」「デュアル」に加え、「総合的な学習の時間」で大学生メンターが加わり内容の質的向上につながった。	B	大学生メンターの継続的な人員確保と事前指導をどのように進めていくのか。大学と連携をとりながら考えていきたい。 また、町内企業や人材の開拓を軽井沢町推進員と進めたい。	
地域との連携	④ 本校の教育活動についての情報の発信	各種媒体を活用して教育活動を発信することができたか。	体験入学・公開授業、学校案内パンフレット、各種新聞等で、本校の教育活動や単位制についての紹介を繰り返していき、志願予定数が増加した。	A	行事の中止といった急な変更が、報道機関に徹底できていない。HPにお知らせを載せ、確認してもらう方法を検討中。	
	ビジョン	① 準備会議を年間5回企画し、他部署と連携して運営を行うことができたか。	単位制の開始に向け、準備会議4回、職員研修2回を計画・運営し、準備を進めることが出来た。	B	3つの方針やグランドデザインのブラッシュアップが行えていない。次年度に検討する。	
		② 魅力ある学校の将来ビジョンの構築	教育課程委員会と協働して、生徒育成方針を実現するための教育課程表を作成できたか。	教育課程委員と連携して、教育課程表を作成することができた。	B	入学した生徒の様子を見ながら、改良を重ねていきたい。
		④ 先進的な取り組みをしている学校の視察を入れたか。	情報収集と検討を重ね、視察候補の選定まで行ったがコロナの関係で実施できていない。	情報収集と検討を重ね、視察候補の選定まで行ったがコロナの関係で実施できていない。	C	オンラインでの視察を含め、コロナの感染状況を見ながら次年度に実施予定。
学校運営	① 学期制・学年担任制の研究、及び職員研修を実施できたか。	単位制導入1年後の姿をイメージしながら研究することが出来た。職員研修を2回実施(信州大学: 荒井先生、臨床心理士: 小林真理さん)。	単位制導入1年後の姿をイメージしながら研究することが出来た。職員研修を2回実施(信州大学: 荒井先生、臨床心理士: 小林真理さん)。	B	職員定数・教員負担とのバランスを見ながら、本校の生徒にとってより良い教育活動を実施していききたい。	
	① 教員業務の精選	業務の選択と集中について検討し、実践できたか。	コロナ禍での経験を活かし、業務の精選を各部署や学年で検討・実践している。教員がもつ多忙感の更なる軽減が課題。	C	部と部、部と学年等の連絡調整を密に行いながら、従来の慣習にとらわれない思い切った業務の精選を進めていく。教員一人ひとりが責任を持つとともに、連携・協力しながら計画的に業務を進めることで多忙感の解消を図る。	
	④ 教職員の高時間労働の改善	年休取得率を前年度比10%増加させ、超過勤務を20%削減できたか。	教員の年休取得率は17.9%(昨年度: 18.7%)。教員の「平日の時間外勤務時間」は昨年度に比べて25%減の状況。今年度の4月と12月の実績を比べても33%減であり、超過勤務削減の意識が浸透しつつある。	C	運動部及び文化活動活動方針に則った部活動運営を実施する。年休を取得しやすい環境整備、定時に帰宅しやすい雰囲気づくりを促進するとともに、呼びかけ積極的に行う。	
	① 評価					内容

A	優れている(優れている状況にある)
B	良い(良い状況にある)
C	おおむね満足(課題はあるがおおむね満足できる状況にある)
D	要改善(課題が多く速やかな改善が必要な状況にある)